



富大考古通信

第12号

パイのこと

昨春、富山への赴任がきまり部屋を探しに来た際に、パイの刺身を食べ、そのボリュームに驚いた。その後、鮮魚店の店先で巨大なパイをはじめて目にし、その姿に納得したものである。『富山なぞ食探検』（桂書房）によれば、富山湾でとれるパイは主に4種類で、15センチほどの大きなものはオオエッチュウパイとチヂミエゾボラ、これらより少し小さく12センチほどで殻の硬いカガパイ、そして大きいものでも7センチくらいのツパイがあるという。煮付けにはこのツパイが使われる。これまでパイといえ、この大きさのものしか知らなかった。

ところで私は、奈良市にある明治中頃の小学校の遺跡からパイを発掘したことがある。そのパイの殻は、石盤や石筆（今のノートと鉛筆にあたる）といった文房具や、石蹴りに使ったと思われる瓦製の円盤などとともに出土した。変わっていたのは、口の部分三分の一ほどを水平に切り取ってちょうど円錐形のようなかたちにしてあったことだ。調べていくうちに、これはパイの殻を用いた「ばいごま」という独楽だということがわかった。殻の中に、砂や鉛をいれておもりとし、蠟で口をふさいで用いた。「ベーゴマ」は、「ばいごま」からきた名称で、明治の後半に現在のような鉄製のものになったとされる。ベーゴマの外側の螺旋は紐を巻きやすくするためのものだと思っていたが、巻貝の殻のなごりでもあることがわかった。江戸時代に広く流行した「ばいごま」も、実物資料に乏しかったが、近年ようやく出土例の蓄積と研究が進みはじめた（池田研「大坂城下町とその周辺から出土したパイゴマ(独楽)について」『大阪歴史博物館研究紀要』第9号、2011年）。

前述の遺跡からは、「ばいごま」の他にも、すぐにはそれが何であるのかわからない遺物がいくつも出土した。このことは、江戸時代や明治時代というそれほど遠くない過去であっても、記憶の中から消え去ってしまうモノが意外と数多くあることを教えてくれたのである。

（次山 淳）

目次

「バイのこと」

次山 淳

修士論文要旨

「弥生時代後期社会の様相－北陸地方の集落の分析から－」

舟崎久雄

「日本の遺跡の整備と活用の研究－特に縄文時代と弥生時代を中心にして－」

関森 想

卒業論文要旨

「細石刃石器群との共伴からみる神子柴石器群についての一考察」

井澤 昇

「縄文・弥生時代における堅果類の食物利用に関する考察－水さらし場の検討を中心として－」

岩崎俊樹

「北陸における木芯粘土室の構造についての検討」

宮嶋厚平

「奈良時代信濃国における諏訪郡衙についての考察－長野県岡谷市榎垣外官衙遺跡の再考察－」

塩澤恭輔

「文殊山城の築城目的・築城年代の再検討－畝状竪掘を中心として－」

北島裕子

「加賀藩江戸本郷邸における食生活に関する一考察－遺存体貝類とその投棄場所を中心にして－」

瀬原史織

修論・卒論発表会と追いコンのお知らせ

編集後記

修士論文要旨

弥生時代後期社会の様相―北陸地方の集落の分析から―

舟崎 久雄

弥生時代後期の集落の構造については、西日本では1棟もしくは2棟一単位からなる住居が最も基礎的な単位であり、それが複数集まったものを「単位集団」、単位集団が一つもしくは複数で集落を形成するとされる。北陸地方では、富山平野の集落は数棟の住居址と1棟の倉庫の組み合わせが単位となり、それが単独あるいは複数集まって一集落となる。なかには集落の中核となる住居址もあるが、平面形態や面積では他とそれほど大きな差はない。古墳時代初頭では「母村」となる集落の中の大型住居址でのみ玉生産をおこなっている。以上の様相は北陸地方に共通するとされる。また倉のあり方について、少数・小型から多数・大型へと変化するが、後者の倉をもつ集落は地域で優位を占めるとされる。

これらの先行研究を受けて、北陸地方の次の5遺跡について分析をおこなった。

- 1、富山県西砺波郡福岡町（現・高岡市）下老子笹川遺跡
- 2、石川県松任市（現・白山市）旭遺跡群
- 3、石川県石川郡野々市町御経塚シンデン遺跡
- 4、石川県金沢市上荒屋遺跡
- 5、福井県坂井郡金津町（現・あわら市）茱山崎遺跡

その結果、集落の構成は、1棟単独または2棟一対が基礎単位であり、それに倉が付属する場合があること、さらに基礎単位が複数で単位集団を形成するという点等々で、西日本の様相に似ていることが判明した。基礎単位の中には、集落内での居住地の変転に合わせて移動しているものあることも判明した。倉のあり方は先学の指摘どおりであるが、それがその集落の、地域での優位性を表すものであるか否かは確定できなかった。

その他、玉生産については、大型住居を中心に生産をおこなってはいるが、中小住居でも生産している可能性の大きいことがわかった。また祭祀については、祭祀用土器の住居跡からの出土状況からは、後期前半から若干量は出土するが、終末期（月影期）に盛んになり、古墳時代前期になると住居跡からの出土は見られなくなっていた。これらの諸点については、玉生産体制や祭祀形態の変化等の具体的内容やその意味について、より考察を深める必要がある。

日本における遺跡の整備と活用の研究

—特に縄文時代から弥生時代の集落遺跡の整備と活用を対象として—

関森 想

今回私は日本における遺跡の整備と活用の研究で特に縄文時代から弥生時代の集落遺跡を対象とした。その理由として以下の点を挙げる。1 点目は、遺跡の整備と活用の研究の対象の多くは寺院跡、古墳、または都城が多く、集落跡の研究が少ない点である。2 点目は、後に述べる整備と活用史の中心に据えたゾーニングという整備技法が集落跡を中心に行われている点である。3 点目が集落跡（復元住居 1 棟整備も含む）の整備の単純な総数が多い点である。この 3 点から研究の中心を集落遺跡に据えたのである。集落遺跡を対象に過去、現在、未来の 3 つの単元から遺跡の整備と活用についての認識を行った。

まずは、遺跡の整備と活用の過去として遺跡の整備と活用史を取り上げた。今回は、戦前の天地根元宮造りを出発点とし、戦後の三大遺跡（登呂遺跡・与助尾根遺跡・平出遺跡）、平城宮跡の整備、平城宮跡の整備計画の中におけるゾーニング、1980 年代・1990 年代の集落遺跡におけるゾーニングの使用状況、そして 3 大遺跡の発掘成果と整備の見直しまでの一連の流れについて述べた。

次に、遺跡の整備と活用の現在として、私が実際に現地に行って見たことを分析し、遺跡の整備と活用の現状と問題点を取り上げた。遺跡の整備と活用の現状として、交通面や自然災害、立地面など 9 つの単元に分けて分析した。また、その他に維持管理の現状と問題点、復元整備をどう行っていくかなどについても述べた。

最後に、遺跡整備と活用の未来として、今後の遺跡の整備と活用がどのように行われていくべきか、2 章の現状と問題点を受ける形で、考察し提言を行ってみた。

以上が本論文の要旨である。

卒業論文要旨

細石刃石器群との共伴からみる神子柴石器群についての一考察

井澤昇

神子柴石器群はおおよそ後期旧石器時代末から縄文時代草創期の移行期に出現した石器群とされているが、研究者間でその時間的位置については評価が異なっている。神子柴石器群は細石刃石器群と共伴する事例が確認されているが、両者の関係に注目することによって神子柴石器群の時間的位置を明らかにできるのではないかと考え、研究を行った。

本論では神子柴石器群の中核的な石器である神子柴型石斧を出土する遺跡の分布図の作製および神子柴型石斧と共伴する細石刃核をその形態と日本列島における出現時期の違いによってⅠ類型・Ⅱ類型・Ⅲ類型の3類型に分類し、それぞれの類型の分布図を作製し比較した。また、両者の共伴遺跡における共伴状況の検討も行なった。

分析の結果、神子柴石器群が細石刃核の3類型のいずれの類型とも共伴がみられる一方、神子柴型石斧出土遺跡が主に分布し、いずれの類型の出土遺跡の分布とも重ならない地域が存在することが確認できた。両者の共伴遺跡における共伴状況をみると神子柴型石斧が細石刃石器群の最終段階にあたるⅢ類型の段階以前から存在していたと思われる事例が確認できた。また、共伴遺跡における出土層位をみると日本列島における細石刃石器群の出現段階において神子柴型石斧を共伴すると思われる事例の存在が確認できた。これらのことから、少なくとも本州において神子柴石器群をもつ集団は細石刃石器群の出現段階から細石刃石器群をもつ集団と移動範囲を分け、一定の関係を持ちながら共存していた可能性があるという結論に至った。

以上のことから、神子柴石器群の時間的位置は従来考えられているような後期旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての移行期に出現した石器群ではなく細石刃石器群と並行して存在していたものと考えられる。

神子柴型石斧と細石刃石器群の共伴遺跡のすべての共伴状況を確認できたわけではないことや、日本列島全体の細石刃石器群の変遷を捉えた分類ができなかったことから可能性を指摘するにとどまる論文になったことが悔やまれる。機会があれば神子柴石器群の個別の実年代などを考慮し、神子柴石器群の時間的位置を見出したいと考えている。

縄文・弥生時代における堅果類の食物利用に関する考察

－水さらし場の検討を中心として－

岩崎俊樹

トチノミやドングリなどの堅果類は、縄文時代から盛んに食用にされ、採取や貯蔵が比較的容易にできる植物質食糧として当時の人々の食生活を安定させた。

そうした、堅果類の可食処理に利用されたとされる水さらし場遺構が東日本を中心に確認されている。水さらし場遺構は、木材によって構築されている場合が多いため残存状況が悪く検出例は少ないが、施設としての機能から考えれば、生活と密接に関わるものであり、当時の食生活をうかがい知るための重要な史料になりえると考えた。しかし、これまでの研究では、その構造や形状についてはあまり触れられていなかった。そこで、各時期の水さらし場遺構の構造や形状、規模などを把握し、構築技術の発展を見出すことにより、堅果類の可食処理技術の発展についても明らかにできるのではないかと考えた。

本論では、対象遺跡の水さらし場遺構について主に「分類」「構築地」「時代」「規模」「構造」「出土遺物」の6つの事項に着目し分析を行った。なお、分類の項目においては、江原英氏の寺野東遺跡遺構分類模式図を参考に作製した遺構分類模式図を用いた。

以上の方法による分析の結果、C類に分類した遺構についての比較および検討から、遺構の小型化の傾向や同一河川内における遺構数の増加が確認でき、水さらし場遺構における構築技術の画期が縄文時代中期後葉から後期前葉にあった可能性が高いことがわかった。

以上のように、水さらし場遺構における構築技術の発展は確かにあったと思われ、そのことから同様に、堅果類の可食処理においても技術的な進歩や発展があったとみて間違いはないという結論に至った。

対象遺跡数が少ない点や水さらし場のみを対象としドングリピットなど他の要素からの検討が出来ておらず、弥生時代の堅果類食について深く検討できなかった点については論文として不十分であり、大変残念に思う。機会があれば、より多くの遺跡や遺構について分析し補完したいと思う。

木芯粘土室とは、後期古墳に用いられた埋葬施設である。その構造は横穴式石室に類似しているが、石材ではなく木材（丸太や板）を骨組みにして、その上から粘土を塗り固めて構築される。畿内を中心に全国各地で確認されており、その中には埋葬された遺体が焼却されている事例も存在する。

北陸に分布する木芯粘土室は、以前は粘土槨の一種として捉えられてきた。それが北野博司氏らの論文により、全国の木芯粘土室と同系統の遺構であるという考え方が提示された。しかし私は、1980年代までの事例には木芯粘土室にみられる柱穴が確認できないことから、それらが同じ種類の埋葬施設なのか疑問を感じた。そこで本稿では、北陸に所在する木芯粘土室として分類される遺構が、本当に同一の埋葬施設であるか検討を行った。

研究対象としたのは、石川県南加賀地方に分布する計14の埋葬施設である。各遺構の規模・構造・副葬品を比較して、類似点や相違点を見つけ出し分類を試みた。また、柱穴を確認できる遺構については、その個数や出土位置により構造を推定した。

分析の結果、柱穴を持たない遺構の規模は、木芯粘土室の規模と差異がみられないことが分かった。また、粘土壁の角度をはじめ、木芯粘土室と類似する特徴を確認することができた。さらに柱穴を持たない遺構には、出土した須恵器に複数の形式がみられた。これは、一度埋葬が行われて、年月が経過してから再び埋葬が行われたことを示しているように思える。そのため、木芯粘土室と同様に横穴式の構造であると考えたい。以上の点から、本稿では柱穴の確認されていない事例も木芯粘土室と同じ構造の埋葬施設であると推定した。

さらに分析の過程で、築造年代が新しい遺構ほど規模が大きい傾向がみられた。加えて築造年代が新しい遺構は、それ以前のものとは比べて内部が複雑化しており、構造も大きく異なっていると分かった。こうした点から、南加賀の木芯粘土室は年代を経て構造が変化したと考えられる。墓室の規模が増加した理由は、被葬者の権威が増大したことにあるのかもしれない。

本稿では木芯粘土室の構造について扱ったが、副葬品の検討が不十分である点や、考察についても明確な結論を提示できなかった点を大いに反省すべきだと感じた。南加賀地方だけでなく、全国の木芯粘土室とも比較を行う必要があると思う。

奈良時代信濃国における諏訪郡衙についての考察

—長野県岡谷市榎垣外官衙遺跡の再考察—

塩澤恭輔

長野県岡谷市榎垣外官衙遺跡は近年発掘調査され、桁行 10 間以上の長い側柱建物址をはじめとする多くの掘立柱建物址から、諏訪郡衙に比定された遺跡である。この発見から信濃の古代研究が盛んになってきている。ただ郡衙としての根拠に疑問を抱いたため、自分自身でも調べてみようと考えた。本論は榎垣外官衙遺跡の諏訪郡衙としての妥当性を考えるとともに古代信濃国について探るものである。

研究方法としては榎垣外官衙遺跡の掘立柱建物址の規模や配置を、集落跡と考えられている鑄師屋遺跡群と伊那郡衙に比定されている恒川遺跡群のものと比較し、榎垣外官衙遺跡との類似性と特異性を考えた。また、山中敏史氏の考えを参考にさせていただきながら、遺構と遺物の出土状況から郡衙としての再検討を行った。さらに、類例郡庁とも同様の比較を行うことで榎垣外官衙遺跡の性格や役割などの把握を試みた。

分析の結果、榎垣外官衙遺跡の掘立柱建物址の規模や配置は集落跡とは考えられず、その建物址の規模は突出して大きく、平面形式には特殊なものがいくつもあることが明らかになった。遺構面では郡衙である可能性が強いと考えられるが、遺物面では文字資料に関わる遺物や特殊な遺物といった郡衙でよく見つかっているようなものはほとんど見られなかった。類例郡庁として近江国栗太郡衙とされている岡遺跡でも同様に分析した結果、榎垣外官衙遺跡の建物址に非常に似ていることが確認でき、榎垣外官衙遺跡に郡庁の存在が窺えた。以上のことから、榎垣外官衙遺跡の郡衙の妥当性としては、遺構面からは諏訪郡衙である可能性は高いと思うが、遺物面からは郡衙とはいえないと考えた。

この矛盾とも言えるような考えを解釈をするためにも各地区の建物址の性格と、信濃国における諏訪郡の経歴や役割を総合的に考察し、榎垣外官衙遺跡が諏訪郡衙である可能性は高いと考えた。遺物の少なさに関しては諏訪郡衙という地がかなり特殊であり、郡庁での執務はあまり行われず、遺跡内の各地区で役割分担をして治めていたからではないかと推察した。

榎垣外官衙遺跡では郡衙の構成していた建物址が全て検出されたわけではなく部分的な検出から推定されているだけである。今後発掘調査がさらに進めば、諏訪郡衙だけでなく信濃国の様子も分かってくると思う。

越前文殊山城の築城目的・築城年代の再検討

—畝状堅堀を中心として—

北島裕子

文殊山城は、福井県福井市と鯖江市の間に位置する山城である。標高は約 370m、残存遺構は郭 48・堀切 10・堅堀 11・畝状堅堀 10 であり、麓には朝倉街道が通っている。文殊山城には畝状堅堀が見られるため、朝倉氏の城であるといわれている。これまでの説では、越前では朝倉氏以外畝状堅堀を使用していないとされ、畝状堅堀を有する城はすべて朝倉氏の城だと考えられてきた。時期は、織田信長の越前侵攻に備えた元亀元年(1570)～の 10 年間といわれている。

越前国内で、畝状堅堀が朝倉氏の物だと断定するため、またどのような城にいつ畝状堅堀を造設したかを明らかにするために、朝倉氏以前に越前を治めていた斯波氏の城、越前で畝状堅堀を有する城を、残存遺構・街道や河川との関係などの地理的特徴から分析し、比較した。さらに、文殊山城の麓を通っている朝倉街道沿いの他の城はどのように防備されているか分析した。

分析の結果、斯波氏が滅ぼされた後朝倉氏に引き継がれた戌山城や栗屋城など一部の城には畝状堅堀が見られるが、そのまま廃城となった城には見られなかった。千田氏の畝状堅堀の地域別の盛行時期によれば、北陸・中部・近畿は天文～永禄期(1525 年頃～1550 年頃)である。朝倉氏の越前平定が 1481 年なので、それ以前に越前を治めていた斯波氏の城に使用されていないのも納得できる。

また、畝状堅堀を有する城で、波多野城や神宮寺城、西光寺城などは城の北側に畝状堅堀が配置されていることがわかった。これらの城は、越前国内での北方、つまり加賀方面から攻められたときの防衛線となる城である。私はこれらの城の畝状堅堀は、織田氏の越前侵攻に備えてというより、むしろ加賀一向一揆を警戒したものだったのではないかという結論に至った。

文殊山城の畝状堅堀は、城の南側、朝倉街道の一部である榎木坂にむかって 10 条施されている。朝倉街道を北上し一乗谷へ至る際、榎木坂と文殊山城を越えると一乗谷城まで山城はない。土塁と堀で構成される東大味館が存在するが、平地の居館であるため戦の際に堅固な防御を期待されていたとは思えない。やはり文殊山城は、朝倉街道の押さえ、それも一乗谷へ向かわせない最後の防衛線として畝状堅堀で強化したという従来の説が正しいと思われる。

加賀藩江戸本郷邸における食生活に関する一考察
—遺存体貝類とその投棄場所を中心として—

瀬原史織

江戸時代の遺跡からは陶磁器等の人口遺物に加えて動物遺存体も豊富に出土しており、それら考古資料や文献史料から当時の食生活について様々な研究が行われている。しかし動物遺存体に関しては魚骨に着目する研究が多く感じられた。そこで本論では動物遺存体の貝類に限定して、江戸の大名屋敷での食生活における使用背景や、その投棄場所に関する考察を行った。

対象とした遺跡は現在東京大学の本郷キャンパスが置かれている加賀藩江戸屋敷、本豪邸である。本豪邸には当時様々な身分の者が生活していたため、遺存体貝類の出土地点の性格もそれぞれ異なる。そこで報告書や絵図からその性格を推定した上で「日常」と「非日常」という2種類に分類し、貝組成との比較を行った。この「非日常」には貝選択の関係から宴会等の饗応の食事と藩主の日常食を含めている。

貝組成の分析は今までの江戸遺跡発掘成果から考えられている格付けを参考にした。ヤマトシジミやアサリ等庶民層に好まれる貝種と、サザエやアワビといった宴会等によく用いられる高級貝種とを区別するため、前者を右に、後者を左に分けたグラフを作成し、その構成差から貝組成の性格を判断する。これらのグラフは遺構ごとに作成し、その時期的変化も比較も試みた。

分析から、地点の性格と貝組成から判断する性格が一致しない地点がみられた。これらの地点は長屋等の居住施設を持たない傾向にあり、空き地であった場合が多い。藩主が生活する空間にはゴミの投棄を避けていたことを考えれば、御殿空間に近いといった空間的理由から投棄場所として選択されたと言える。貝組成に関しては、アサリがあまり食べられていないことや、サザエ等の高級貝種であっても庶民に入手可能であったことがわかった。

以上の結果から、大名屋敷における食糧残滓の投棄に関して、消費地点と投棄場所が同じである場合は投棄された残滓は「日常」を、消費地点と投棄場所が異なる場合は「非日常」である傾向があることがわかった。また江戸時代における食生活の研究に関して、遺存体貝類は魚骨よりも遺跡からの出土量が多い。加えて「日常」や「非日常」といった使い分けの意識が強いことから、貝組成の分析を行うことは当時の食生活を考える上では有益であり、特に大名屋敷においてはその使用背景を考えるための重要な要素であると言える。

平成 23 年度 富山大学考古学研究室修論・卒論発表会

日 時：2012年3月4日(日) 13:00～

場 所：富山大学人文学部2階 4番教室

* 聴講無料 * 申込不要

お問い合わせは 076-445-6195 (富山大学考古学研究室)

もしくは tomidaikouko@yahoo.co.jp まで

当日のスケジュールは次のとおりです (順番が入れ替わることもあります)

【修士論文】 13:00～

①舟崎久雄「弥生時代後期社会の様相－北陸地方の集落の分析から－」

(参考文献：都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店)

②関森 想「日本の遺跡の整備と活用の研究－特に縄文時代と弥生時代を中心にして－」

(参考文献：文化庁文化財部記念物課 2005『史跡等整備のてびき－保存と活用のために』)

【卒業論文】 14:00頃～

③井澤 昇「細石刃石器群との共伴からみる神子柴石器群についての一考察」

(参考文献：岡本東三 1979「神子柴・長者久保について」『研究論集』V、奈良国立文化財研究所)

④岩崎俊樹「縄文・弥生時代における堅果類の食物利用に関する考察－水さらし場の検討を中心として－」

(参考文献：佐々木由香 2007「水場遺構」『縄文時代の考古学』5 なりわい－食糧生産の技術－、同成社)

⑤宮嶋厚平「北陸における木芯粘土室の構造についての検討」

(参考文献：北野博司 1983「箱形粘土嚙の再検討と横穴式木室との関連性について」『北陸の考古学』)

⑥塩澤恭輔「奈良時代信濃国における諏訪郡衙についての考察－長野県岡谷市榎垣外官衙遺跡の再考察－」

(参考文献：岡谷市教育委員会 2008『榎垣外官衙遺跡』郷土の文化財 29)

⑦北島裕子「文殊山城の築城目的・築城年代の再検討－畝状堅掘を中心として－」

(参考文献：青木豊昭 2003「朝倉義景時代の山城－その縄張りの特徴と意義」『朝倉義景のすべて』新人物往来社)

⑧瀬原史織「加賀藩江戸本郷邸における食生活に関する一考察－遺存体貝類とその投棄場所を中心にして－」

(参考文献：秋元智也子 1992「加賀藩上屋敷「御貸小屋」における食生活の一端」『江戸の食文化』吉川弘文館)

編集後記

暦の上では春ですがまだまだ寒さの厳しい季節が続いております。

春は出会いと別れの季節です。卒業される先輩方には1年間という短い期間ですがお世話になりました。先輩方のますますのご活躍とご健勝を心より願っています。

本格的に桜が咲く季節となれば、新2年生5人が研究室に入ってきます。新たなメンバーを加えてさらに日々の研究室での活動に励んでいきたいと思えます。

(金田朋子・寸田彩加)

富大考古通信 第十二号

配信日 2012年2月27日

編集・配信 富山大学人文学部考古学研究室

住所 930-8555 富山市五福3190

TEL 076-445-6195

留守番アクセス 4000 BOX番号 6195

HP <http://www.geocities.jp/tomidaikouko/>

メール tomidaikouko@yahoo.co.jp

※ メールにつきましては、迷惑メールと区別するためタイトルに必ず「富山大学考古学研究室」と入力して下さい。ご協力よろしくお願いたします。

